



副会長就任のご挨拶

拝啓 陽春の候、皆様におかれましてはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

4月1日付で特定非営利法人アンハードノートピアノパラ委員会の副会長に就任いたしました近藤（たけなが）和子と申します。

当委員会には、2001年以来、ピアノパラリンピックという目標を掲げて出会った日本全国・世界各地のピアニストたち 150名以上のリストがあります。

様々な障害を抱えながらも、独自のピアノ演奏のスキルと境地を拓き、不可能を可能にしてきた演奏家たち、そのご家族と音楽教師の物語も記録保管されています。

兄（会長 迫田時雄）は「音楽、中でもピアノは世界の歴史と古典芸能への知識の窓である。ピアノが弾ければ、その後どんな楽器にも馴染める。実際に弾き、集中すればするほど感じる自分の細胞への共振が、脳を活性化させ人を成長させる。さらに、ひとつの芸能によって障害を克服し、才能を開花させることができたなら、それによって経済的にも自立した人生が可能になる社会的支援が不可欠である」と、20年以上にわたり世に問い続けて、なお道半ばだと言います。

病気は、治せない障害症状を遺します。高齢になることも同じです。「見えない・聴こえない・歩けない・食べられない」などなど、望まない障害を次々に引き受けざるを得ません。

それらの様々な障害を治療する医学・医療には限界があります。しかし、人々に生き甲斐と命の輝きをあたえてくれる音楽、古典芸能、あらゆる芸術活動の修練には限界はないと看護師としての私は確信しています。

これまで輩出してきた多くの珠玉のピアニストたちのためにも、また彼らの演奏によって触発されるかもしれない障害のある未来の子どもたちのためにも、これまで続けてきた兄の**実践**の最終ラウンドを引き受けることにしました。

どのような形に落ち着くかはまだわかりませんが、思いもよらない大海原には豊かな恵みが待っているだろうことを信じて、船出してみます。

皆様、くれぐれもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

敬具

令和6年4月吉日

特定非営利法人アンハードノートピアノパラ委員会

副会長 近藤（たけなが）和子



【近藤和子プロフィール】

看護師、グリーフカウンセラー

マザーリング&ライフマネジメント研究所 所長

公益財団法人日本尊厳死協会「小さな灯台プロジェクト」代表

1947年6月1日生まれ。鹿児島県出身。1982年マザーリング研究所（現：マザーリング&ライフマネジメント研究所）設立。患者・家族のニーズと想いを追及し、独自の接遇理論を構築。“医療接遇”をテーマにした介護・医療施設での接遇研修は100か所を超える。一貫して終末期医療とリビング・ウィル、ケア職やご家族のグリーフケアを考え、**実践**を続ける。

●略歴

東京大学医学部附属看護学校卒業

茨城大学教育学部養護教諭養成課程修了

日本カウンセリングアカデミー卒業

カナダカルガリー大学看護学部主催ファミリーナーシングユニットイクスターンシップ受講

英国赤十字セラピーティックケアプラクショナー資格取得（2009年）

東京大学医学部附属病院接遇向上センター顧問（2006年～2010年）

マザーリング研究所（現：マザーリング&ライフマネジメント研究所）設立（1982年）

●著書

『はじめての医療接遇』ごきげんビジネス出版,2018年

『看取りのグリーフケア』ごきげんビジネス出版,2022年 <https://bit.ly/3JkBdmP>

ほか多数。

バイオリニストであった父からの優しさの贈り物

父はバイオリニストでした。終戦直後（1950年～）の復興教育のために、九州一円荒廃した小学校を訪ね、兄がピアノ、姉が歌、私がバイオリン、父がバイオリンを弾きながら指揮をして演奏してまわりました。『心に太陽を唇に歌を！』と。楽器が何もなくとも、黒板をリズムカルにたたいて「ほら！誰でも、どんな物でも音楽を楽しめる！」とパフォーマンスし、みんなで合唱して元気づけていました。小学校の隅々まで歩き周り「耳を澄ますと聴こえてくるよ。花も木の葉も、川も、森もみんな言葉や音で伝えようとしているよ」と言い、それを楽譜にし、校歌を作曲してさしあげることも……。そんな演奏旅行についてまわっていた幼少期、兄も私も、音楽が果たす役割や考え方、演奏方法やマナーなどを父から教わりました。55歳という早さで亡くなった父ですが、父からもらった優しさの贈り物＝五感のもてなし＝マザーリングの心は、私の原点になっています。